林石材店では解体時に出た墓石材を自社工場で加工し、敷石として再利用する提案を進めている（これまでに複数のお寺において施工実績を持っている）。

棄物として括られることも多いが、それを資源として再利用する取り組みも見られている。

新潟県長岡市の林石材店では撤去した墓石の上台・中台などを自社工場で切削し、お寺の敷石として再利用する提案を進めている。既に複数のお寺において施工実績があり、各寺院の住職からも共感をいただける取り組みになっているようだ。

廃材となると処分費用もかかってしまうが、資源と考えれば元手のかからない材料ともなる。加工できる設備があってこそ、こうした対応も可能であり、加工の仕事を継続する面で、また加工機械を維持する面でも、持続可能性（サステナビリティ）を意識した取り組みともいえるだろう。

石の流れ模様を墓石材として活用

加工時の端材と解体時の廃材の石材活用について取り上げたが、環境問題を考える上で、石材業全体の中で最も大きな比重を占めるのが採掘時となるだろう。

石種や丁場によって歩留まりも変わってくるが、墓石として使われるのは採掘される原石のごく一部で、墓石や建築材などとして使われない石は土木用に回ったり、廃棄処分の対象にもなっている。キズなどの瑕疵がある場合には当然弾かれるが、流れ模様のある原石などは品質的には問題がなくても、これまで墓石材としてはほとんど使われてこなかった。

そうした従来の固定観念に一石を投じ、流れ模様を自然が生み出したオンリーワンのデザイン・魅力として評価する動きが見られている。

茨城県産「桜川まかべ石（採掘元：潮田石材）」を使用した永代供養墓の施工事例（茨城県北茨城市の㈲神永石材が設計・施工）

「天の河」の建墓事例
（兵庫県神戸市の㈱第一石材が設計・施工）

瀬戸内産の銘石の中から流れ模様のある石材を使って製品化しているブランド「天の河」、茨城県産「やさとみかげ」の中で流れ模様のあるものを「やさと雲龍石」と命名してブランド化している取り組み、茨城県産「真壁石」の中で流れ模様のあるものを「桜川まかべ石」と命名してブランド化している取り組みなども見られている。

SDGsそのものをPR

自社でSDGsの取り組みに力を注ぐと共に、地域に対してもSDGsそのものを知ってもらお